

世田谷村日記

石山修武

十一月十六日

第四回の²¹C農村研究会の進め方を今日甲斐さんと相談しなくては。利根町佐藤さんと連絡。利根町をケーススタディの一つとしたい。石川さんのダーチャもあることだし。午前中、色々と連絡についやす。十四時半大学。昨日の会のチェックと次回の会の相談。そして来年八月迄の展望についてミーティング。十七時過迄。²¹C農業の中の、フリーターの若者と高年齢者を対象としたビジネスモデルを作らねばならない。森正洋先生の佐賀新聞追悼文書く。十八時了。十八時半 社長若松氏モスクワより戻ったと事で近江屋でビール飲む。オイルビジネスの展望が開けたようで心強いが、何しろ相手がロシアだ。中国同様近代初期の力オスの中に全てがある。二〇時了。二十一時過、世田谷村に戻る。佐賀新聞にFAX送附。室内編集部三砂君から借りた「年を歴た鱈の話」レオポール・シヨヴォ原作、山本夏彦訳、読む。こういう空気を持つ書物を一生に一度だけでも作ってみたいと思うが、十六歳で武林無想庵に連れられてパリに行き、二度自殺を企てたという山本夏彦と比べたら、私は全くミジンコみたいな者であるから、作れないだろうが、作ってみたい。山口勝弘さんとの絵本をこんな風に出出来ないものかと考えてしまう。

十一月十七日

八時利根町長島さんと連絡。²¹C農村研究会で学習農園計画を進める件について。

十一時大学。²¹C農打合せ。十三時教室会議。人事小委員会。十六時芸術学校会議。双方の会議でバウハウス大学とのトラベリング・ユニバーシティ計画を報告。了解を得たと、了解したので早速公けに動く。十七時半研究室に戻り、渡辺と北京計画他打合せ。台北のCY・LEE、北京の郭浩伝と連絡。北京、台北、東京と次第に良いトライアングルになってきた。これでモスクワが動けば面白くなる。二十一時前世田谷村。「年を歴た鱈の話」再読。